**随筆部門選評**

今年も、心のこもった作品を、大切に読ませていただきました。物を書くという行為は、自分の生き方を振り返ることにつながります。そこから自分の主張を表現することは、本当に時間のかかる行為です。題材の選定、文章の構成、推敲と書き進めている皆さんの崇高な姿が浮かんできます。そのご努力に心から敬意を表します。

今年度の応募は、四十作品でした。とても多くなったのはオンラインでの応募が可能になったことや、多くの学生の出品があったことも一因であると思います。手書きの方が二十五名ありました。力強い筆致の方もありましたが、文字に癖があったり、薄くて読みづらかったりする作品もあって、困ることがありました。

内容は、両親や自分の若かったころなどを懐かしく振り返ったものや、定年後に取り組んだり、自分の身近な社会に目を向けて考え、行動したりしたこと等、多岐にわたっていました。書き慣れた感じを受ける作品もいくつかありました。文全体の構成もしっかりしていて、流れるように文章が綴られている印象を受けました。また、自分の思いが読み手に伝わるように題名や書き出しに工夫を凝らした作品もありました。

読み応えのある作品も多くありましたが、課題として感じるのは次の点です。自分の過去の出来事をたどることは出来ていますが、主張に迫り切れていないこと、原稿用紙五枚という規定を意識して書くという姿勢が弱いこと、技巧を凝らしすぎてかえって事象が多くなり、読みづらくなっていること、無段落で全文を書いたり、一文が八行以上あったり、誤字・脱字があったりしたことです。推敲を重ねて、言葉や文章を大切にしてほしいと思いました。

今年度も広域でしかも幅広い年齢層から応募いただきました。県内三十一点（大垣市二十三点）、県外は千葉県や京都府からの応募も含めて九点となりました。年齢は、九十代二名、八十代三名、七十代三名、六十代五名、五十代三名、四十代二名、十代二十二名です。

若い方の投稿も増えて、作品内容の幅が広がりました。

選外になりましたが、進藤拓さんの「ネパールのお客さん」は、母国の家族のために働きながら勉学に励む外国人の若者と、電車の車掌との交流を描いた作品です。働く姿の美しさを通して、自分の仕事を見つめなおし、彼らを応援する筆者の姿が温かく描かれています。山河ゆみこさんの「瑞穂百貨店」は、戦後創設され、地域の人々の生活だけでなく、生きる知恵や生活の輪を広げた百貨店の存在意義まで深めて書かれていました。閉店するにあたって、昭和のよき思い出が目の前の出来事のように生き生きと描かれています。坂田隆さんの「九十一歳になったぞ」は、健康に対する真剣な考え方や取り組み方が力強く伝わってくる作品です。「歩いて長生きしよう」という声が聞こえてきそうです。

いずれも書き手の熱意を感じる作品が多く、誠実な姿勢を感じました。どの方も前向きに人生に対峙して、よりよい作品を作り上げようとされていました。真摯な取り組みに心から敬意を表するとともに、来年度も生活を見つめた感動ある作品の応募を期待しています。

文芸祭賞「母を語る」

宮島 早苗代

戦争の犠牲になって中国大陸で亡くなった母。四歳で死別した母との二つの思い出を基に、支えてくれた人々への感謝を糧に、悲惨な中でも今を懸命に生きる筆者の姿が描かれています。命の重みを問う姿に、戦争に対する怒りが伝わってきます。

秀作「ムベの中で」

　　　　　　　　　　　　　竹村　京子

不老長寿の木といわれるムベに巣作りをしたキジバトが、カラスに襲われて卵を抱いたまま命を落とすという作品です。孵化を楽しみにしていた筆者の様子がよく描かれています。「ムベ」を場面に設定して巧みに展開しています。詳細な情景描写も見事です。

秀作「三十八年目の夢舞台」

　　　　　　　　　　　　　安藤　邦緒

「トランペットでソロ曲を吹けるようになりたい」、そんな願いが最初から最後まで流れています。退職後に練習に励む様子や三十八年目に実現した夢舞台の描写も見事で、感動が伝わってきました。

秀作「目を凝らして」

　　　　　　　　　　　　　　大江　豊

中日詩人会の講師、冨長覚梁先生の指導の言葉に心を動かされ、その言葉に力をもらっていた筆者。四月に亡くなられた、温かくも鋭い眼光を持って詩に情熱を注がれた先生を悼む作品です。一人の詩の愛好者として、詩作に取り組む筆者の姿に感動を覚えます。

佳作「幸せという味わい」

森　惇

本当の幸せとは何なのかを考えさせてくれる作品です。家族全員で味わった素敵な景色の中でのフルコースの料理。でも覚えていたのは家族団らんの楽しさでした。書き出しもよく考えられています。

佳作「我が家のアイドル」

渡辺　昇

ペットからアイドルとなり、家族を動かす存在になっていく文鳥の様子が温かく描かれています。何気ない日常の中で、文鳥への愛情が徐々に深まる様子を流れるように書いています。アイドルを亡くした寂しさも伝わってくる作品です。

佳作「花火は短いが人生は長い」

服部　勝美

華やかな花火大会の日が、筆者にとっては彼への重い「不信」が確定する日となります。どうしようもない苦しみや悲しみがよく描かれています。悲しみから立ち直り、娘と生きて来たことが分かる冒頭は秀逸です。

佳作「鹿渡島観音」

　　　　　　　　　　　　藤川　六十一

父を亡くし、故郷に一人残る母。そんな母を気にかけ故郷に帰り、母と一緒に観音崎を訪れた筆者。道案内をするかのように登場した地元の女の子。この子の動きや言葉が、若き日の辛い母の思い出と重なり、深い意味につながっていきます。幻想的な終わり方も作品に余韻を持たせています。

佳作「私の一人称」

吉田　梨乃

自分の呼称に悩む筆者の姿が伝わってきます。誰もが小さい時に経験していると思いますが、呼称の変化がその時々のエピソードと共に語られています。面白い視点から描かれており、考えながら成長していく姿が感じられます。

佳作「生きて生活保護の辱（はずかしめ）を受けず」

松宮　信男

生活保護を受けることを拒み、孤独死を選んだ行政書士の姿と、社会福祉に身をゆだねることも大切だという筆者の主張が強く描かれている作品です。悲壮なまでの死を覚悟した背景も描かれていて、重い内容になっています。

佳作「誰も知らない成果　ひとりひたすら

ゴミ拾い」

　　　　　　　　　　　　　　駒田　俊

退職後、会社で培ってきた取り組みを故郷の美しい環境づくりに生かそうと孤軍奮闘する姿を描いています。社会貢献とはいえ、人間は認められないと継続することは難しいと思います。強い思いを持ちながら、たった一人で継続している姿を応援したいと思います。

審査員　 　大石　英文

　　　　　今津　佳代子

**詩部門選評**

今回の応募作品には、良質なものが集まりました。かなり熟練された方の応募もあり、選考は難しくそして楽しいものでした。日常が一瞬ドラマになっていく独創性、詩の視点に潜在的な美しさや、死生観の奥深さがありました。

文芸祭賞「お葬式」

この作品の死生観の奥ぶかさ、美しさの完成度に瞠目しました。残酷であるけれど、その現実を夏の夕やけで、みごとに浄化しています。―ぼくは純真無垢ではいられない―その一行の心のゆらぎ、心情を加えたことが効果的でした。

秀作「麒麟よこぎる」

世界情報の不安にぬぐえないものがあります。―難儀だね―この言葉の意味に重みがあります。麒麟が登場するどこかファンタジーであり、人間が生きる糧の視点が組み込まれています。

秀作「月」

隙間からの月あかりの出だしから、夜空を移動していく月あかりの陰、月は特別な存在として永遠もまた瞬いています。―今日の記憶が消えそうで―、この行によって作者と月の親密に結ばれる瞬間があります。

佳作「汽車」

世界の秩序は脆いもので、人類がいるかぎり、完全な解決の道はみつからないことを、―正しい／汽車など／走ってないのだ―示唆しています。

佳作「少年のこと」

出だしは平凡ですが、回想の終連―あの時のように小さく光って／ちょっと震えて―少年時代の痛々しさも魅力のひとつです。

佳作「雨」

雨が暗示する潜在的なテーマは、心理的に追ってくるものがあります。―形のないのに／形を、与えるもの―、そして―形があるのに／たやすく、壊れるもの―、その深淵の表現が人間の正体を示唆して哲学的に深い意味になりました。

佳作「残されたいことば」

現代の老人社会では、いずれ訪れる人生の最期を示唆しています。飛騨の方言が不思議な懐かしさです。題名にひと工夫が必要です。

審査員　　樋口　健司

　　　　椎野　満代

**短歌部門選評**

今年のNHKの大河ドラマ「光る君へ」の中には紫式部をはじめ多くの和歌が出てきます。千年も昔から詠い読み継がれてきた短歌は、将に現代文学の基となるものです。

文芸祭賞

「船頭の棹一本にたらい舟

いつもの町がゆっくり動く」

日頃見慣れている大垣の街並を、水門川の盥船に乗って見る。感動と共に「いつもの町」への深い慈しみが感じられる。

秀作

「接点のみつからぬまま帰りきて

ふき上がらぬようそうめん茹でる」

相容れぬものに堪えて己の心を戒め鎮める時、日常の素麺を茹でる行為に託して、心情を詠った女性ならではの作品です。

秀作

「白髪が陽に透かされて輝ける

菩薩のやうな午睡の妻よ」

妻への想いに満ちたこの歌は、菩薩のようなと比喩した老いた妻への深い愛情が感じられます。

秀作

「華やかな五輪のニュースに引き続き

銃声響く戦禍のニュース」

テレビのニュースをありのまま詠っただけなのに言葉に表われていない作者の想いを、読む人の感性に託され、誰もが感じている感情がこの歌の中にあります。まさに現代を詠む機会詩としての記録性が生かされています。

選者吟「激動の時代を生きしわがひと世

　　　　　　　　　今静かなる会期を思う」

山本　次能

選者吟「雨はれて山気すがしき峡の

村簗場乗り越え濁流踊る」

広瀬　紀子

選者吟「白昼の睡魔に負けて文机に

伏し寝る広辞苑開きたるまま」

高瀬　寿美江

審査員　　山本　次能

広瀬　紀子

高瀬　寿美江

**俳句部門選評**

文芸祭賞「露の世にぽつんと二つ膝小僧」

しらが式部

後や先、明日をも知れぬという露の世に、ぽつんと二つ膝小僧は神妙に生かされています。「ぽつん」は、孤のイメージ、観念の風情、二つは個ではなく複数、連れ合いの表情か。来るものを拒まず受け入れるの心とみるべきや、潔い心がけ、露の世に生きるのこころ。

秀作「切り捨てし実にも声かけ袋掛」

 田中　紫香

袋掛は果樹栽培で果物の品質の維持や病虫害を避けるために紙の袋で包む。そのとき、必要に応じ摘果も行う。その摘果の実に、折角大きくなったのに御免ねと声をかける優しさ。立派に大きくなる望みが絶たれた実が、可哀そうである。同じ境遇に余り苗というのがあるが、人間界にも形は違うが無しとは言えず、何れの世も不運はあるようでまさに無常である。

その他、水中花の句に見る覚悟の披瀝、合歓の花の郷愁、昼寝覚めの軽妙酒脱、鶴翼の陣形も敗退虚しく、首塚の句の陰湿、素麺の句の平凡な暮し、かき氷の句の細やかな愛情、など俳句はどこをどのように捉えて書くかが、大切に思います。

選者吟「根性は顔に出るなりいぼしむり」

※いぼしむり＝カマキリ　　　田中　青志

選者吟「日記には記せぬ戀や秋津とぶ」

名和　永山

選者吟「駅名に募る旅情や薄紅葉」

大堀　武直

審査員　　田中　青志

　　　　　大堀　武直

　　　　　名和　永山

　　　　　名和　よちゑ

**川柳部門選評**

最近の世の中は、紙の上に文字を書くという機会が減ってきたように思います。企業だけでなく、行政、教育、医療他あらゆる分野でデジタル化が進み、幼児から老人に至るまで、書くより打つ（入力する）が強制されています。さらには、創造の機能までがＡⅠという技術で人間の世界に入り込んできました。

　川柳部門における応募件数は百五十一名・応募句数は四百二十四句でした。これは昨年より共に二十五％減っています。然し、デジタル投句は殆ど減っていません。ということは紙に書いて応募するという人が少なくなったということです。鉛筆を持たなくなった、持てなくなった、または御他界？・・・・　そしたらある方が、「前回の応募が多すぎたんですよ！」これで半分納得しました。

　選者には、ハガキ大にして、十八ポイント位の太角ゴチック体で印刷された句が届きます。自筆投句はそのまま句面をコピーしたものが届きます。勿論、投句者の名前はありません。

自筆で書かれた句の方が、句意の情景がよく伝わり、疲れません。ヒトが書いた文字には、不思議な説得力があるのですね。

　もちろんメール投句も大歓迎です。他の選者ともども来年のご投句をお待ちしております。

文芸祭賞「保育器をにっこりさせた大欠伸」

未熟児で産まれた赤ちゃんでしょうか、それとも最近は、どの赤ちゃんも保育器に寝かせるのでしょうか。それまで握っていた手をパッと開いて大欠伸をする新生児は、新ママや看護師さん、周りの大人たちを微笑ませます。そんな場面を、「保育器をにっこりさせた」表現しました。見事な比喩法です。

秀作「子離れを終えアナログへ戻る脳」

四十年程前、紙・誌上に「インターネット」という詞が沢山見られるようになり、私もその勉強を始めました。齢の割にはデジタル機器をこなしていると思いますが、二人暮らしになった今、生活臭がないテレビは見なくなり、カードというのは診察券だけ、支払いは全てカミさん、と全くのアナログ人間に戻りました。

秀作「終活を始めましたと言う地球」

今年の猛烈な暑さも、各地で起こっている戦争も、この句が秀作に選ばれた理由でしょうか。七十年程前に「地球最後の日」という映画を見ました。これは他の天体が地球に衝突するという筋立てだったと記憶し

ています。この句は、そういう災害でなく、地球を人間に置き換えてこの句を読むと、置換の手法が活きて来ます。

秀作「名人の読みの深さに声も出ず」

この句をサラッと読んで、将棋の藤井聡太名人を詠んだのかと思いました。しかしそれだと、下句の「声も出ず」が浮いてしまいそうです。上句の「名人」は「名人と言われる人たちは」と読んだ方が理解しやすいのではと思いました。然し、ふっと我に返りました。声が出なかったのは、名人では

なくて私の方だ。数十手も先を考えるなんて、へえー凄い！でした。

秀作「おしゃべりな家電へ返事して独り」

この作者は男性でしょう。それも、今日はカミさんが外出して留守番だと思います。だから家電の声がカミさんの声に重なってしまうのです。独り暮らしの男性は慣れてますから、ブスッとして声なんか出しません。

　きっと、お出かけ前にいろいろとセットしてあるのでしょうね。わが家ではそのあとの指示が食卓の上にメモ書きしてあります。洗濯物の干し方まで。

選者吟「思い切り枝葉落して再起動」

草　野　稔

選者吟「手の届くところにあった宝物」

　三浦 珠美

選者吟「三年で見切りをつけた石の上」

武　山　博

審査員　　武　山　博

　　　　　草　野　稔

　　　　　三　浦　珠美